君からの、お前からの2

あずま渡里

君からの、お前からの２

あずま渡里

プランツの小話

プランツドールな俺は、ずっと誰も選ばなかった。
愛され、求められない訳じゃない。女だけじゃなく美少女にしか見えない、いや、美少女よりも綺麗なんで野郎をも惹きつけた。
だがどんな美男美女や金持ちが現れても、俺は目覚めようとしなかった。
プランツドールにとって、確かに愛情は糧になるが――どうでもいい奴からの愛なんて、邪魔で鬱陶しいとしか思えないからだ。

「大将は極上品なのに、何で持ち主を選んだの？　自由になりたかったからー？」
「あ？」
「まあ、鶴蝶はちょっと面白いけどさー？　大将の初めては『全プランツドールに愛される存在』って奴だったんでしょ？　それって、逆に特別感無くない？　どんな奴だったのー？」

大将は、最高級のプランツドールなだけじゃなく、色んなことを知っている。何でも大将を作った職人が話好きで、大将を作っている時に色々話聞かせていたらしい。
……もっとも、職人の大将への愛情はあくまでも『子供（創作物）』に対してのもので。
大将がその職人を持ち主に選んだ時は、土下座して謝られた末にメンテナンス行きになったんだが――その時に、プランツドール専門店店主の息子である鶴蝶と出会い。両親と共に、イザナを別の職人のところに連れていこうとしたところで事故にあった。

そして鶴蝶が死にかけてたのを肩代わりした挙げ句、大将は家族を亡くした鶴蝶に『下僕』の役割を与えて手に入れた。だからこそ、大将は職人の苗字である『佐野』じゃなく、鶴蝶の苗字である『黒川』を名乗っている。

話が逸れたが、そんな訳で店にいて眠っている俺らと違って、大将は自由に動けるし俺らの食事の時なんかに聞けば大抵のことは答えてくれる。実は、喋らない方が都合が良いので下級のプランツドールに合わせて喋らないが、上級品であればある程、普通に会話が出来る。

ちなみに俺らと大将が話している時、餌係の鶴蝶は大抵、席を外す。本当に、良く出来た大将の下僕である。

話を戻すが、そんな大将から聞いた『全てのプランツドールに愛される存在』とは。

「底抜けの、それこそ馬鹿がつくくらいのお人好しだな」

「……ひどくねー？　大将」

「真一郎が『ソレ』だったからな。俺には、言う権利がある」

「大将、何でそんな奴に惚れたのー？」

聞いていても、全く良さが伝わらない。

けれど、そんな俺に大将は紫水晶の目をつ、と細めて言った。

「愛される存在な俺（プランツ）が、守らなきゃって思うくらいに弱いのに……アイツは守って、与えてくるんだよ。真一郎は、俺がメンテナンスされるならって職人を辞めた。適正が合わないとか、今はバイク屋だってのは結果論だ。最弱王のくせに、心をやれないからってアイツは代わりに人生をくれたんだ」

大将の話は、そこで終わった。

その話を思い出したのは、泣いている武道が店に近づいてきた時――じゃなくて、死ぬのが解っているくせに、逆に死ぬまでの人生を俺にくれた時だ。

最初、近づいてきたのを感じた時は、考える前に目覚めて動いていた。

ショーウィンドウに出ると、悲しさと悔しさに囚われて武道は俯いていた。その顔を上げて欲しくて、こちらを見て欲しくて――気づけば、極上の笑みを武道へと向けていた。

（ああ。お前は、なんにも悪くないよ）

だから、そんな風に縮こまるな。救ってやるから、俺に惚れろ。

世界を呪う武道にそう思っていたが、望んだ通りに顔を上げた瞬間、涙に濡れた青の綺麗さからただただ目が離せなくなった。そしてその後も、俺は散々武道にアピールした。

だけど完全に落ちたのは、泣きながらも武道が俺を選んでくれた時――死ぬまでずっと、俺といるって本人知らず決意に目を輝かせた時だ。

（あぁ、コレは惚れるわ、大将）

守らなくちゃと思った。愛さなくちゃと思った。

馬鹿がつくくらいのお人好しで、そのせいで侮られたり仕事もクビになったらしいけど。せいぜい可愛い子ぶって一日でも長く生かして、最期は大将みたいに肩代わりしてでも助けようと思った。結果、病気が完治した上に俺も成長して、ますます出来ることが増えた時は、思わず心の中の大将にお礼を言った。

……だって、愛情を糧にする俺が一瞬で満たされたくらい、コイツはたっぷり愛情をくれるから。

プランツじゃなく人間だが、俺にくれた分で空っぽになって枯れないように、しっかりお返ししてやって一生一緒に生きようって心に決めた。

おんなじの小話

プランツドールには、専用の基礎化粧品や入浴剤がある。
そんな訳で蘭を購入した時に、武道もそれらをローンで一緒に購入した。そして蘭をお風呂に入れ、体や髪を洗う時に石鹸やシャンプー、あと入浴剤などを使った。
「蘭君、気持ち良かった？　うわぁ、お肌しっとりスベスベだし、髪もサラサラツヤツヤ！　すごいねぇ」
「……」
「蘭君？　ごめん、熱かったり痛かったりした？」
初めて会った日の夜の、風呂上がり。シルクのパジャマを着せて長い金髪をドライヤーで乾かした後、武道は感激して声を上げた。
だが、どうも蘭の様子がおかしい。元々話せはしないのだが、口をへの字にして武道を睨むように見上げてくる。体や髪を洗う時、あるいは髪を乾かす時に何か嫌なことをしてしまっただろうか？　部屋の汚さは唯一、寝る為に物が置かれていないせんべい布団の上に避難することで、黙認されたようだけれど。
そう思い、謝りながら尋ねるが蘭はフルフルと首を横に振る。では何故、と武道が首を傾げていると蘭は洗って下ろした自分の髪を指差し、次いで武道の癖っ毛を指差すとまた首を横に振った。
「えっと……蘭君の髪と、俺の髪、が……違う？」
武道の問いかけに、今度はコクンと蘭が頷く。
「んー、色とか髪質とかは元々、違うし……あっ、シャンプー？」
考えながら言葉にしていると、コクンと蘭が大きく頷いた。

確かに蘭はプランツ専用のシャンプーだが、武道は元々の安物シャンプーを使っている。いるが、それがどうしたのか。

武道が首を傾げていると、不意に蘭が武道の頭を自分へと引き寄せて――クンクンと、匂いを嗅いできた。

「えっ、蘭君!?」

「……」

「えっと……このシャンプーの匂い、嫌い？」

洗っているとは言え、いきなりのことに焦って顔を上げると、蘭は今度は丸い頬を膨らませて不満を訴えた。だから不満の理由を考えてみたが、少し違ったらしい。ぐりぐり、と自分の頭を武道の頭に擦りつけてくるのに、可愛いと思いながらも「もしかして」と思いついた。

「……同じ匂いが、いいの？」

そう尋ねると、蘭は頷く代わりにギューッと武道に回した腕に力を込めた。

その可愛さに抗うことなど出来ず、しかしまさか武道の安物シャンプーを使わせる訳にはいかないので――武道は「同じシャンプー、使わせてね」と蘭に言って、満面の笑顔を向けられたのだった。

※

プランツ用のシャンプー、だけではなく石鹸や入浴剤、更に化粧水やリップクリームを使った結果、武道の肌艶や髪艶は格段に良くなった。病気が完治したら尚更である。

だが竜胆も一緒に暮らすことになり、新たな事実が判明する。
「タケミチ、兄ちゃんの匂いだな」
「ああ、同じプランツ用のシャンプーを使ってるからね」
「？　だからソレ、兄ちゃん専用だろ？」
「えっ？」
蘭が竜胆の支払いを済ませている間、抱っこをしていると竜胆が教えてくれた。
何でも最高級、更に気難し屋と呼ばれるプランツともなれば香りや品質にもこだわるので、職人が販売前にプランツに聞いて一式作らせるそうだ。だから、このシャンプー等の香りは蘭のみが使っているらしい。
「そうなの⁉　あ、じゃあ、竜胆君専用のシャンプーとかもあるの？」
「ん？　俺はこだわりないし、むしろタケミチや兄ちゃんと同じがいい」
「流石、俺の弟♡」
竜胆の言葉に、嬉しそうに言ったのは戻ってきた蘭だった。昔は、単に可愛いと思っただけだったが。
「俺、愛されてるんだねぇ……蘭君？　俺、蘭君の気持ちに少しでも返せてる？」
「勿論♡」
「むしろ、これだけ兄ちゃんキラキラだから、少しどころじゃないと思う」
照れてはいるが、蘭からの愛情を素直に受け止めた武道からの問いかけに――蘭はご満悦の笑顔で答え、竜胆はプランツドール目線でそう言った。

誕生日の小話

竜胆は、職人に作られてすぐ店に来て、同じくすぐ蘭と武道のところに来た。
だから蘭のように、眠りながらも客達の欲望塗れな戯言を聞いていたり、イザナや鶴蝶と話したりしていないので知らないことが多い。目下テレビを観たり、武道や蘭に聞いたりして勉強中だ。
……けれど、いや、だからこそ。
竜胆は、躊躇せず正解を掴み取る――そう、ちょうど今のように。

「タケミチー。今度のクリスマスって、イエスっておっさんの誕生日なのか？」
「おっさ……まあ、でも、うん。そうだね」

三ツ谷の仮縫いを終えて、帰ってきた日の夜のこと。
風呂上がりで金髪を下ろしている竜胆は、可愛いが口が悪い。とは言え、言っていることはあっているので、ソファに座り竜胆を膝に乗せていた武道は頷いた。ちなみに同じく金と黒の長い髪を下ろした蘭は、武道と並んでテレビを観ていたが今は二人のやりとりを眺めている。
「誕生日だから、ケーキ買ったり飾り付けしたりするんだな？」
「クリスマスを祝ってだから、まあ、そうだね」
「じゃあ、タケミチの誕生日はもっと祝わないとな！」
「……え？」

「だって、知らないおっさんでこれだけ祝うんなら、タケミチはもっと祝わないとだろ？　ツリーとケーキ、もっとデカいの用意しないとっ」
「竜胆君⁉　ツリーはクリスマス専用だし、試作品って三ツ谷君がスマホで見せてくれたブッシュドノエルより大きいのって、俺らで食べきれないからっ……でも、嬉しいな。ありがとうね、竜胆君」
ふんす、と気合いを入れる竜胆を、武道はツッコミを入れつつも最後は笑って抱き締めた。そんな武道に腕を回して、蘭はその肩に額を埋めて言う。
「……サイズは考えるけど、来年こそは。武道の誕生日に、美味いもん食おうなー」

六月二十五日。当時、病気が悪化していた武道は食欲が落ちていて、ご馳走どころか一日一食食べることすら辛い状態だった。
竜胆は、あの時の――そしてあの後の、痩せ細って青白い顔をした武道を知らない。
蘭としては、それで良いと思っている。独占欲は否定しないが、武道が死にかけたことを知らないからこそ、竜胆は無邪気に来年の、そして未来の話が出来る。そしてそんな竜胆の言葉が、武道を驚かせたり喜ばせたりするのだから。
武道にくっつきながら、幸せを噛み締めて目を閉じていた蘭の耳に、不意に思いがけない言葉が届く。
「って言うか、来年は二人の誕生日も祝おうね」
「……武道？」
「俺ら、プランツドールだぞ？」

「でも、君達は俺の家族でしょ？　蘭君は、五月二十六日。竜胆君は、十月二十日……俺と初めて会った日を、それぞれの誕生日にするのはどうかな？」

続けられた言葉に驚き、蘭と竜胆が顔を上げると――兄弟の視線の先で、綺麗な青い瞳がキラキラと輝いていた。

言葉こそ問いかけだが絶対、蘭達に受け入れられると思っている。何事にも自信が無かった武道が、蘭と竜胆に愛されているからこそ出来るようになった眼差しだ。

「最高じゃん、武道♡」

「俺は、ケーキ食えないから……また服、タケミチとお揃いな！」

「え⁉　またコスプレ⁉」

「アハ♡　竜胆の誕プレだから、観念しろー？」

今日、仮縫いまで終わった武道の服は、上着の丈が短いチャイナ服と、黒基調のゴスロリと言うかスチームパンクな服だった。プランツドールの服に寄せた感じで、確かに普段使いではない。だがどちらも武道に似合っていたので、来年の竜胆の誕生日に合わせて、また三ツ谷に頼もうと思う。

「ってか、それなら俺の誕生日は、蘭君とお揃……って、駄目だ！　ただ格好良いだけだっ」

「駄目が駄目ー♡　俺が着こなせないのは、武道のダサい服だけだからなー」

「辛辣！」

「なー、兄ちゃん。新しい服買う度に、タケミチのダサい服燃やそ？」

「竜胆君⁉　可愛く怖いこと言っちゃ、駄目！」

「ダメ？」

「うぅ、上目遣い可愛い……」
「竜胆の勝ち。武道、諦めろー？」
揶揄いつつ、けれど宥めるように蘭と竜胆で武道の頭を撫でたり、頬にキスをしたりしながらその日の夜は更けていった。

トクベツの小話

武道達の住む村には、服屋や特産品を扱う売店はあるが、食堂などの飲食店はない。住民は基本、食事は家で食べるし何かあれば近所で持ち寄るので必要ないのだ。ちなみに、武道の大好物であるコンソメ鬼パンチは、売店で買えるので問題ない。

話を戻すが、だから俺がコテージを買って九井や三ツ谷を来させると決めた時、毎日ではないので食事は近所のババァ達に頼むつもりだった。

「三ツ谷君みたいな料理上手に出すのは、恥ずかしいけど……お金を貰うんだからしっかり教わって俺、もっとレパートリー増やさないとね！」

……そう、武道が気合いを入れて宣言するまでは。

※

すぐにこの村に引っ越してきた（ゴミこそ分別したが、部屋の現状復帰代代わりに家具や家電は置いてきた）が、一泊だけした武道のアパートは狭いのに、せんべい布団以外はゴミや脱ぎ散らかした服ばかりで、より狭く感じるくらい汚なかった。だから家賃を浮かせる為に、とこの村の古民家に来たのは良いが広くなった分、余計に散らかるのではと心配していた。

……だけど昔、大将に聞いたことがあった。

「俺らが選んだ奴が、プランツを汚ねー部屋なんかに住まわせるかよ」

何でも店に来るのが富裕層が多いと言うのもあるが、プランツドールに選ばれる者の中には当然、庶民や貧乏人もいる。しかし彼らはたとえ自分を疎かにしても、愛するプランツドールの為には掃除だろうが洗濯だろうが何だってして尽くしまくり、結果として生活レベルが上がるらしい。そしてそれは、武道も同じだった。

仕事をしながらも俺らの為に家中、いつも綺麗にして。流石にプランツ用の服はクリーニングだったが、村に来てから着るようになった俺や竜胆の普段着は、マメに洗濯してくれた。あと自分一人だと食事も適当だったが（金がなく買い食いは出来なかったが、卵かけご飯や納豆ご飯、モヤシ炒めばかりだったと言う）俺も食べるようになってからはしっかりと自炊するようになった。村の年寄り達に習ったが定番の和食以外にも、俺が食べ盛りだからって唐揚げやカレーライス、あと餃子やハンバーグなんかも覚えてきた。そしてそんな武道の美味しい手料理は、竜胆が専用のミルクや砂糖菓子しか口にしないから、俺だけが食べていたのに。

「ババァ達に、作らせりゃいーじゃん。イケメン……なのはともかく、若い奴相手だから喜ぶだろー？」

「ら、蘭君、ま、ちょっ、苦しっ」

「やめるって言うまで、離さねー」

「俺も、兄ちゃんにさんせー……タケミチは、俺らのじゃん」

竜胆と三人で暮らすようになってから、テレビの前に設置したソファで――夜、食後に宣言した武道を、俺は気絶させる勢いできつくきつく抱き締めた。

そんな俺に、隣にいる竜胆も丸い頬をぷくっと膨らませながら賛成する。この調子だと、年末に来る予定の乾のミルクも武道が温めるって言いそうだからだ。

（盗られるとは思わねーけどよー？）

それでも、嫌なものは嫌だ。
……そんな俺らに、だけど武道が言う。
「だってそれじゃあ、俺だけ何もしてない。素人だけど、俺も頑張れることは頑張りたいよ」
「それは」
「これが、俺。だから蘭君、竜胆君……甘やかすって言うんなら、観念しろやっ！」
「「っ!?」」
啖呵を切られて、咄嗟に力を緩めた隙に武道は離れて、逆に俺と竜胆を優しく抱き締めてきた。そして驚いた俺らに、同じく優しい声で嬉しいことを言ってくれた。
「でも、蘭君と竜胆君が俺の特別だから……俺も、君らを甘やかすね？　蘭君が独占したい料理は、蘭君スペシャルだから絶対に他の人には出さない。竜胆君スペシャルは……子守歌のきらきら星は、竜胆君にしか歌わないって言うのは、どうかな？」
「……カレー」
「解ったよ、蘭君！」
武道の言葉に、それこそ観念して顔を上げた俺は唇を尖らせながらも答えた。好きなのは勿論だが、イメージが『家庭料理』だからだ。絶対に、他の奴らには譲らない。
一方、武道の子守歌が大好きな竜胆も、パッと顔を上げて言った。
「絶対だぞ、タケミチ！　俺のトクベツなんだからな……他のヤツに歌ったら、また泣いて新しい『天国の涙』押しつけるからなっ。返品不可なんだからなっ!?」
「怖っ！　絶対しないけど、怖っ！」
「アハ♡　それいーな竜胆、採用♡」

「蘭君まで!?」

そして竜胆の言葉に、頷きつつも『天国の涙』の価値に怯えて涙ぐむ武道を見て、俺は笑いながらもちゃっかり便乗した。

……こうしてコテージのリフォーム完成後、宣言通り自家用ヘリでやって来た九井と乾を年末年始に迎えたが。

見た目に反した九井の食いっぷりは、本当に凄まじく。

食べ方は綺麗なんだが、武道が作っても作ってもあっという間に無くなるのを見て、流石の俺もババァ達に頼まなくて良かったと思うばかりだった。

君からの、お前からの2

発行日　2023 年 6 月 16 日

著者　あずま渡里
https://www.pixiv.net/member.php?id=3229042
連絡先　contact@rainbow.sakura.ne.jp
印刷　シメケンプリント / かんたん表紙メーカー

Generated by pixiv
本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。